

# 日本語諸方言におけるラ行五段化の通方言的一般化 —語幹末母音・語幹モーラ数・接辞の観点から—

みやおか ひろし  
宮岡 大\*

(九州大学大学院人文科学府)

## 1. はじめに

本発表では、日本語諸方言（九州・四国・雲伯・近畿・東海・東北）でみられる「ラ行五段化」現象について、その生じる条件を方言間で比較することによって通方言的に一般化する。実際に観察される方言間バリエーションを記述し、可能なパターンと不可能なパターンを予測できるモデルを階層の形で提示する。

「ラ行五段化」とは、現代日本語諸方言において、動詞の母音語幹（i 語幹・e 語幹・i/u 語幹・e/u 語幹）が子音 r 語幹（ラ行五段）と同じ形態論的振る舞いをするようになる、通時的現象である（表1の太字部分）。

表1. 宮崎県椎葉村尾前方言の動詞語形と基底表示（発表者データ）

		語幹	否定非過去	過去
子音語幹	r 語幹	togir- 「削る」	<i>togiran</i> /togir-a-n/	<i>togitta</i> /togir-ta/
	i 語幹	mi(r)- 「見る」	<i>miran</i> /mir-a-n/	<i>mita</i> /mi-ta/
母音語幹	e/u 語幹	hute- 「捨てる」	<i>huten</i> /hute-n/	<i>huteta</i> /hute-ta/

表1には、宮崎県椎葉村尾前方言の子音語幹と母音語幹の動詞語形を示している。母音語幹のうち、いわゆる上一段にあたる i 語幹動詞「見る」の語形に着目する。過去形 *mita* は、いわゆる下二段の e/u 語幹「捨てる」と同様に、語幹/mi-/ に過去接辞/-ta/ が後続する。一方、否定非過去形 *miran* は、r 語幹「削る」と同様に、子音 r 終わりの語幹/mir-/ に語幹母音/-a/ が後続した/mir-a/ に否定非過去接辞/-n/ が後続する。ラ行五段化は、「見る」の否定非過去形 *miran* にみられる、母音語幹が子音 r 語幹と同様の形態論的振る舞いをする現象を指す。

尾前方言の母音語幹のうち、i 語幹はラ行五段化するが、e/u 語幹はラ行五段化しない。加えて、i 語幹動詞について、否定非過去形はラ行五段化するが、過去形はラ行五段化しない。このように、ラ行五段化は、母音語幹動詞の語形（動詞語幹+接辞）全てにおいて生じるものではない。さらに、このようなラ行五段化を引き起こす条件は方言ごとに異なっている（§2）。

本発表では、ラ行五段化が生じる条件を方言間で比較し、各方言においてラ行五段化に関与する動詞語幹と接辞の条件を、階層によって通方言的に一般化する（§3）。加えて、この一般化が成立する理由を、語形の使用頻度から説明する（§4）。

\* miyaoka.0164 (at) gmail.com

## 2. ラ行五段化が生じる条件の方言間バリエーション

本節では、ラ行五段化が生じる条件の方言間バリエーションを概観する。前節でみた宮崎県椎葉村尾前方言（以下、尾前方言；発表者データ）と、大分県九重町方言（以下、九重町方言；糸井 1964）を例にする。ラ行五段化に関与する動詞語幹と接辞について、尾前方言と九重町方言で比較すると以下ようになる。

表 2. ラ行五段化に関与する動詞語幹の方言間比較

語幹末母音	/i/		/e/	
	1	2	1	2
尾前方言	○	○	○	✕
九重町方言	○	✕	○	✕

表 3. ラ行五段化に関与する接辞の方言間比較

接辞	意志	否定非過去	命令	過去
尾前方言	○	○	○	✕
九重町方言	○	○	✕	✕

「○」はラ行五段化に関与する、「✕」はラ行五段化に関与しないことを示している。表 2・表 3 に示すように、ラ行五段化には、関与する動詞語幹末母音と動詞語幹モーラ数、接辞の種類に条件がある。加えて、この条件には方言間バリエーションが存在する。

## 3. ラ行五段化が生じる条件の通方言的一般化

本節では、前節で示したようなラ行五段化の方言間バリエーションを記述し、可能なパターンと不可能なパターンを予測できるモデルを、階層の形で提案する。

### 3.1. 先行研究

本節では、日本語諸方言のラ行五段化を通方言的に扱った先行研究として小林（1996）を概観し、その問題点を述べる。小林（1996）は、言語地図『方言文法全国地図』（GAJ）やその準備調査の結果を用いて、日本語諸方言におけるラ行五段化形式の回答数を調査している。以下では、ラ行五段化に関与する動詞語幹と接辞のそれぞれを変数とした、ラ行五段化形式数の調査結果を概観する。

動詞語幹「起きる」「見る」「開ける」「寝る」「する」「来る」について、それらの否定形・意志形・過去形・命令形におけるラ行五段化形式数の大小についての調査では、(1)のような結果を得ている。[ ] 内に示しているのは、実際の回答数である。

(1) ラ行五段化形式の回答数 (活用形: 否定形・意志形・過去形・命令形)

起きる	≡	見る	≡	寝る	>	開ける	>	する	>	来る
[87]		[89]		[86]		[36]		[12]		[4]

一方、動詞の否定形・使役形・意志形・過去形・命令形それぞれについて、(1)の動詞語幹 6 つにおけるラ行五段化形式数の大小についての調査では、(2)のような結果を得ている。

(2) ラ行五段化形式の回答数 (動詞語幹: 起きる・見る・開ける・寝る・する・来る)

使役形	>	意志形	≡	命令形	>	否定形	>	過去形
[256]		[121]		[119]		[101]		[10]

小林 (1996) が示すラ行五段化形式の回答数の大小は、各方言におけるラ行五段化の条件を捨象している。そのため、各方言におけるラ行五段化の実態を必ずしも反映しているとは限らず、説明できない方言データがある。九重町方言 (糸井 1964) は、1 モーラ語幹がラ行五段化に関与する。これは、(1)の結果における「見る」「寝る」に該当する。これらの語幹 2 つのラ行五段化形式数は「起きる」のそれとほぼ同値であるとされているが、九重町方言において「起きる」のような 2 モーラ語幹はラ行五段化に関与しない。接辞については、意志と否定非過去がラ行五段化に関与し、命令と過去は関与しない。(2)の結果をみると、「意志形」と「命令形」のラ行五段化形式数はほぼ同値であるとされているが、九重町方言において命令形はラ行五段化に関与しない。

### 3.2. 検討する方言データの概要

本発表で検討するデータは、図 1 に示す日本語 55 方言 (九州 37・四国 6・雲伯 1・近畿 5・東海 2・東北 4) である。データの出典の詳細は、宮岡 (2021: 31–38) を参照されたい。

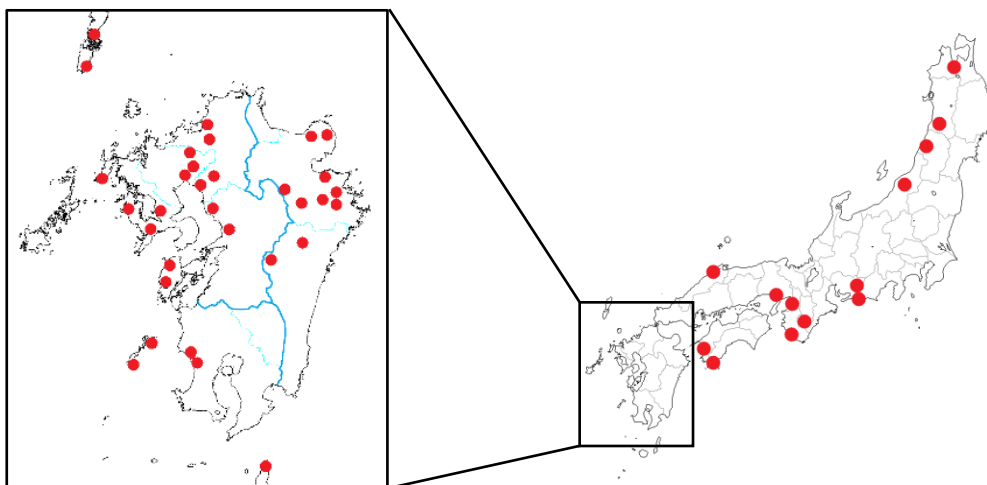


図 1. 検討する方言の地理的分布 (発表者作成; 詳細は宮岡 2021)

### 3.3. ラ行五段化に関与する動詞語幹の一般化

本節では、ラ行五段化に関与する動詞語幹を階層によって一般化する。「語幹末母音」と「語幹モーラ数」を基準にして、(3)の左からラ行五段化に関与しやすい順に示す。

#### (3) ラ行五段化に関与する動詞語幹の一般化

- a. 語幹末母音: /i/ > /e/
- b. 語幹モーラ数: 1 モーラ > 2 モーラ

(3a)は、一方言における特定のモーラ数の語幹について、語幹末母音/e/ の語幹がラ行五段化に関与するなら、語幹末母音/i/ の語幹も関与することを示している。(3b)は、一方言における特定の語幹末母音の語幹について、2 モーラの母音語幹がラ行五段化に関与するなら、1 モーラの母音語幹も関与することを示している。3 モーラ以上の語幹は一般化の対象外である<sup>1</sup>。

#### (4) 九重町方言（糸井 1964）

- |                   |                 |                   |                 |
|-------------------|-----------------|-------------------|-----------------|
| a. <b>mir-a-n</b> | b. <b>oki-n</b> | c. <b>ner-a-n</b> | d. <b>uke-n</b> |
| 「見ない」             | 「起きない」          | 「寝ない」             | 「受けない」          |

#### (5) 尾前方言（発表者データ）

- |                   |                    |                   |                  |
|-------------------|--------------------|-------------------|------------------|
| a. <b>mir-a-n</b> | b. <b>okir-a-n</b> | c. <b>ner-a-n</b> | d. <b>hute-n</b> |
| 「見ない」             | 「起きない」             | 「寝ない」             | 「捨てない」           |

### 3.4. ラ行五段化に関与する接辞の一般化

本節では、ラ行五段化に関与する接辞を階層によって一般化する。(6)の左から関与しやすい順に示す。一方言における特定の語幹末母音・語幹モーラ数の語幹について、階層中のある接辞がラ行五段化に関与する場合、それより左の接辞も関与する。

#### (6) ラ行五段化に関与する接辞の一般化

意志 > 否定非過去 > 過去

命令接辞・否定過去接辞・連用形に後続する接辞・使役接辞は、この一般化の対象外である<sup>2</sup>。

#### (7) 愛媛県旧明浜町方言（野林 1970）【語幹末母音/e/・2 モーラ語幹】

- |                   |                 |                  |
|-------------------|-----------------|------------------|
| a. <b>uker-oo</b> | b. <b>uke-n</b> | c. <b>uke-ta</b> |
| 「受けよう」            | 「受けない」          | 「受けた」            |

#### (8) 奈良県十津川村方言（平山 1979）【語幹末母音/i/・1 モーラ語幹】

- |                  |                   |                 |
|------------------|-------------------|-----------------|
| a. <b>mir-oo</b> | b. <b>mir-a-n</b> | c. <b>mi-ta</b> |
| 「見よう」            | 「見ない」             | 「見た」            |

<sup>1</sup> 一般化に用いた多くの先行研究には、3 モーラ以上の語幹のデータが示されていないためである。

<sup>2</sup> 命令接辞は、ラ行五段化形式に生じる r について、属するのが語幹か接辞か共時的に判断できないからである。否定過去接辞は、語形の形態構造に方言間バリエーションがあるからである。連用形に後続する接辞・使役接辞は、一般化に用いた先行研究に網羅的なデータが示されていないためである。

## 4. 一般化の理論的解釈: 語形の使用頻度から

本節では、(3)(6)に示す一般化がなぜ成立するか、語形の使用頻度に着目して説明する。言語変化に対する説明モデルの1つである用法基盤モデル (usage-based model) の枠組みにおいて、類推変化 (analogical change) は使用頻度の低い語形のほうが生じやすく、使用頻度の高い語形は類推変化が生じにくいとされる (Bybee 1985, Phillips 2001)。ラ行五段化とは母音語幹から子音 r 語幹への類推変化に他ならず、そうであれば、使用頻度の低い語形の方に生じやすいと考えることができる。そこで、本発表では以下の仮説(9)を設定する。

(9) ラ行五段化の一般化(3)(6) は、語形の使用頻度を反映している

以下では、この仮説(9)が妥当であることを、語形の使用頻度を調査することによって示す。日本語諸方言を対象に、(3)(6)に示した動詞語幹や接辞を含む動詞語形のトークン頻度を調査する。調査には、国立国語研究所 (2020) 『日本語諸方言コーパス』 (COJADS; Corpus of Japanese Dialects)<sup>3</sup> を用いる。§ 4.1 では動詞語幹の使用頻度を、§ 4.2 では接辞の使用頻度を調査する。その結果、(3)(6)の階層の左から、使用頻度の少ない順に並んでいることを示す。

### 4.1. 動詞語幹

本節では、(3)に示す動詞語幹の一般化について、動詞語幹の使用頻度から説明する。日本語諸方言における動詞語形の使用頻度について、COJADS による調査結果を、語幹末母音と語幹モーラ数ごとに表 4 に示す。

表 4. 日本語諸方言 54 地点における動詞語幹の使用頻度

語幹末母音	1 モーラ	2 モーラ	
/i/	160	368	528 (1.96%)
/e/	788	2,785	3,573 (13.29%)
	948 (3.53%)	3,153 (11.73%)	26,877

表 4 の一番右の列に着目する。動詞語幹の使用頻度を語幹末母音についてみると、「語幹末母音が/i/ の語幹 < 語幹末母音が/e/ の語幹」となっている。これは、(3a)に示す語幹末母音の一般化と照らすと、使用頻度の低い語形のほうが類推変化を生じやすいという予測と一致している。次に、表 4 の一番下の行に着目する。動詞語幹の使用頻度を語幹モーラ数についてみると、「1 モーラ語幹 < 2 モーラ語幹」となっている。これも、(3b)に示す語幹モーラ数の一般化と照らして、使用頻度の低い語形のほうが類推変化を生じやすいという予測と一致している。このように、動詞語幹の一般化(3)は、動詞語幹の使用頻度を反映していると考えられる。

<sup>3</sup> 調査は、2020 年 11 月に行った。この時点の COJADS Ver.2020.03 には、文化庁が 1977～1985 年に行なった「各地方言収集緊急調査」の方言談話データ約 35 時間分（日本語諸方言 54 地点）が収録されている。COJADS の詳細は、<https://www2.ninjal.ac.jp/cojads/index.html> を参照されたい。

## 4.2. 接辞

本節では、(6)に示す接辞の一般化について、それぞれの接辞を含む語形の使用頻度から説明する。日本語諸方言における動詞語形の使用頻度について、意志形・否定非過去形・過去形ごとに COJADS による調査結果を表 5 に示す。それぞれの語形について、COJADS における検索方法は宮岡（2021: 64）を参照されたい。

表 5. 日本語諸方言 54 地点における動詞語形の使用頻度

語形	出現数	(割合)
意志形	77	(0.48%)
否定非過去形	1,607	(5.98%)
過去形	3,005	(11.80%)
動詞語形	26,877	

表 5 に示すように、日本語諸方言の談話資料におけるトークン頻度は、「意志形 < 否定非過去形 < 過去形」の順になっている。これは、(6)に示す接辞の一般化と照らし、使用頻度の低い語形から類推変化が生じるという予測と一致している。

## 5. おわりに

本発表では、日本語諸方言におけるラ行五段化について、動詞語幹と接辞に関して方言ごとに異なる条件があることを示し、この条件を階層によって通方言的に一般化した。この一般化が成立する動機について、語形の使用頻度という観点から説明した。コーパスを用いて語形の使用頻度を算出し、一般化の左から右へ語形の使用頻度が低い順に並んでいることを示した。この結果から、ラ行五段化は語形の使用頻度という通方言的な基盤をもつことを主張する。

## 参考文献

- Bybee, Joan L. (1985) *Morphology: A study of the relation between meaning and form*. Amsterdam: John Benjamins.
- 平山輝男 (1979) 「言語島奈良県十津川方言の性格」『言語研究』76: 29–73.
- 糸井寛一 (1964) 「九重町方言の動詞の語形表」『大分大学学芸学部研究紀要 人文・社会科学 A 集』2(4): 28–54.
- 小林隆 (1996) 「動詞活用におけるラ行五段化傾向の地理的分布」『東北大学文学部研究年報』45: 242–266.
- 宮岡大 (2021) 「日本語諸方言におけるラ行五段化の方言間比較と通方言的一般化 ―語幹末母音・語幹モ―ラ数・接辞の観点から―」修士論文, 九州大学. [<https://researchmap.jp/miyaokah/misc/31850056>]
- 野林正路 (1970) 「方言研究の新しい地平 ―弁証法的な記述様式の確立をめざして―」平山輝男博士還暦記念会 (編)『方言研究の問題点』319–355. 東京: 明治書院.
- Phillips, Betty S. (2001) Lexical diffusion, lexical frequency, and lexical analysis. In: Joan Bybee and Paul Hopper (eds.) *Frequency and the emergence of linguistic structure*, 123–136. Amsterdam: Benjamins.